



TITLE:

沒價值性理論の成立

AUTHOR(S):

出口, 勇藏

CITATION:

出口, 勇藏. 沒價值性理論の成立. 經濟論叢 1939, 49(1): 185-200

ISSUE DATE:

1939-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131264>

RIGHT:

經濟學叢論 每月一日發行
昭和十四年七月一日發行
大正十四年六月二十一日第三號郵政特准掛號

京都市帝國大學經濟學會

經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十四年七月

(禁轉載)

京都帝國大學經濟學部創立二十年記念論集

田島・戸田・神戸・小川・河上・河田・山本・作田の前八教授肖像

記念展覽會及講演會寫眞

國家の社會的構成

完全豫見の問題

時局下に於ける農業計畫生産

世界經濟の動向

小工業の特質と其の助成方針

ナチスの經營共同體の理論及び構造に就て

徳川時代の經濟統制

信用理論と其の經濟的基礎

企業聯繫としての再保險

マックス・ウェーバーの國民主義

ロバートソンの物價變動理論

中小工業と市場

沒價值性理論の成立

政策學としての日本經濟學

日本經濟學の根本原理

經濟學部二十年を回顧して

經濟學部創立二十年記念經濟學會大會記事

彙報

外國雜誌論題

法學博士	河田嗣郎
文學博士	高田保馬
經濟學博士	八木芳之助
經濟學博士	柴田敬
經濟學士	大塚一朗
經濟學士	中川與之助
經濟學士	堀江保藏
經濟學士	中谷實
經濟學士	佐波宣平
經濟學士	白杉庄一郎
經濟學士	青山秀夫
經濟學士	田杉競
經濟學士	出口勇藏
經濟學博士	谷口吉彦
經濟學博士	石川興二
經濟學博士	本庄榮治郎

沒價值性理論の成立

出口 勇 藏

一

嚮に吾々はマックス・ウェーバーの初期の研究をフライブルヒ大學就任講演『國民國家と國民經濟政策』(一八九五)に代表させて、彼の實踐的な研究態度と國民經濟政策の價值規準に關する彼みづからの、當時の諸々の主張との對決における主張とを詳細に紹介することによつて、その當時の彼の方法論的見解を窺ふところがあつた。¹⁾吾々が抽出した二つの方法論的命題はいづれも經濟政策論と關係を持つてゐた。その第一の命題においては、經濟政策學が國民的な特徴を以て國際的であるところの理論的および歴史的部分と對立すべきことが示めされ、その第二の命題においては、「國民國家の權力價值(Machtinteresse)」を價值の規準として立言される經濟政策學の目標、ひいては國民經濟學全體のそれとまた、政治教育に存するものでなければならぬと云ふことが結論されてゐた。すなはち經濟政策學の認識の主體の實踐的・政治的性格がそこで高唱されてゐたのである。従つてまた、そこでは政策の主體が國民層の中から求め搜されねばならなかつた。政策の主體探求のこの態度は、ヘーゲルが『法の哲學』において、國家の普遍的關心をば擔當しうる「普遍的階級」を市民社會の諸階級の中から選び出さうとした態度に比することが出来る。又ヘーゲルのその精神を繼承して同じく市民社會を止揚すべき行動の主體——頭腦と心臓と——を現實の分析から獲得した若き日のマルクスのそれにも較べることもできると云はれよう。けれどもウェーバーを特徴づけるものは、先づ彼が市民社會を止揚しようとする根本的な意圖を持たずに、唯々市民社會的に構成せられてゐる國民國家の他の國民國家との對立における權力價值の増大と云ふ目的において、政策の主體を追求したことである。彼は資本主義を他の國民經濟組織に置きかへようとは考へなかつた。彼の生涯を一貫した中心的な問題は、ヤスパースも云つてゐるやうに、「吾々は歐洲においてなにゆゑに資本主義と云ふものを持つたか」と云ふだけであつたのである。而して次にヘーゲルやマルクスが積極的な解答に到達した——彼等の解決のそれぞれはどんなに批判に曝されうとは云へ——のと異つて、彼が遂に消極的な解決に辿りついて「國民の政

- 1) 拙稿「マックス・ウェーバーの初期の研究」(本誌本年五月號)。
この一文はその續稿である。
- 2) K. Jaspers; Max Weber. S. 6.

「治教育」と云ふことに解決への道を發見したことが第二に特徴的である。吾々はここで此就任講演がドイツの政界に與へた波紋と教育界への影響とについて一言しておくべきであると思ふ。元來アドルフ・ストエツカーのやうな保守的政見を持たなかつたフリードリッヒ・ナウマンは民主主義を主張して彼と袂別してゐたが、ウエーバーの此講演にも深く動かされた。國民的なものを唯々倫理的價值としてのみ考へてゐた彼は、これによつてそれを政治的權力的要素として見ることを知つて、基督教社會主義より國民社會主義に轉向した。一八九六年十一月の「國民社會協會」(Der national-soziale Verein)の設立はその結果である。ウエーバーは社會民主黨の一部を引入れようとするナウマンのこの企圖を最初から諫止しまた批判もしたが、しかし選舉運動に應援の手をさしのべた。が選舉の結果はナウマンの惨敗に終つたのであつた。後年(一九一七以後)ナウマンが「國家公民學校」⁵⁾「ドイツ政治高等學校」を開いたことを吾々は知つてゐる。この教育的活動はウエーバーの影響によるものでなくて何であらうか。

二

ウエーバーが方法論の研究に専心しはじめたのは一九〇二年であると傳へられてゐる⁶⁾。彼を此研究に導いた動機は次の三つであつた。先づ彼が過勞から起つた神經性の疾患のために旅行と靜かな書齋生活とを餘儀なくされ、哲學の書物にも近づいたこと。第二にハイデルベルヒ大學の哲學科から同大學の記念出版への寄稿を求められたこと。第三にあたかもその當時「方法論論争」が盛に行はれてゐたこと。そこで彼は「方法論論争」に對する自らの解答を以て求められた寄稿の責を果さうと決意した。彼は獨創的思惟に富む思想家であつた。彼が中學生時代に三つの歴史研究を書いてゐて、それらにおいては少年にも似ず考へ方が非常に獨創的であつたと傳記作者は書いてゐる⁷⁾。さう云ふ彼が方法論論争に對するみづからの解答を提出しようと思ふ意圖においても亦、從來の自らの思想をあひたたかはれてゐる問題と關聯させつつ深め基礎づけると云ふ方法を取つたことは、極めて當然であると思はなくてはならない。その際しかしながら、彼は當時の哲學者の文化科學の方法論を援用しようとし

3) Marianne Weber; Max Weber. SS. 230-236.

4) Staatsbürgerschule.

5) Deutsche Hochschule für Politik.

6) Marianne Weber, ibid; S. 272.

7) ibid; SS. 49, 50.

た。彼はヴィンデルバント・ディルタイ・リッケルト・ジンメル・ミュンスターベルヒを涉獵したが、結局彼に最も縁のあつたのはリッケルトであつた。彼はリッケルトと少年時代より相識の間柄であつて、この哲學者の『自然科学的概念構成の限界』を出版されると早速讀んで、その思想に多大の賛意を表明してゐる。⁸⁾ ウェーバーと西南學派の思想との間に偶然的以上の内的聯關があつたことを、吾々は注意しなければならない。

ウェーバーは方法論に關する最初の勞作を歴史學派の方法論批判と云ふ形で行つた。何故なら、彼自身「歴史學派の門弟」であり、⁹⁾ 彼自らの思想の反省はやがて歴史學派の批判たらざるを得なかつたから。彼は舊歴史學派の巨匠達に深い尊敬を捧げてゐた。初期の研究において彼が次のやうに書いてゐるのはその一つの表明である。

「恐らく吾々こそ、我學派の物故せるまた現存の巨匠達のかの偉大なる資質が——それらのお蔭でその人達と科學とは成果を得たのであるが——吾々のところで缺點に變化することのないやうに心すべきであらう。¹⁰⁾」而してまた舊歴史學派の主張の中には、方法論論争において争はれてゐる二つの主張が相ならんで含まれてゐたと云ふことが注意されねばならない。即ちそこでは「歴史的方法」が主張されてゐる反面に、「國民經濟の自然法則」が承認を得てゐたのである。此事が如何にして可能であるか、それを究明することがやがて論争の解決に資する所以である。とウェーバーには考へられたのである。而してその研究の結果が『ロッシヤの歴史的方法』¹¹⁾であり、『クニースと非合理性の問題』¹²⁾であつた。吾々がこの二つの論文のうちから前者を取り出して方法論への第一步を知らうとするに先立つて、ウェーバーによつて批判されたロッシヤの經濟政策の概念について一般的な了解を得ておきたいと思ふ。

8) ibid. SS. 272, 273.

9) M. Weber, Gesammelte Politische Schriften S. 22. なほ吾々は讀む、「歴史學派——吾々自身もその子なのだが——」と。(Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre S. 208.)

10) M. Weber; Gesammelte Politische Schriften. S. 22.

ロツシャーが『グランドラーゲ』において理想主義的方法 (idealistische Methode) を卻けて専ら歴史的あるひは生理的方法 (historische od. physikalische Methode) を以て經濟學の方法としたことは知られてゐる。¹³⁾ けれども理想主義的方法の放棄は必ずしも實踐的態度の喪失を意味しはしなかつた。彼は歴史的あるひは生理的國民經濟學が實踐的でもありうると云ふことを主張する。國民經濟學は「早速に云はば紙型にとられうるやうな」實踐的理論を展開するものではないが、しかし「實踐家を育生する」理論をば與へるものである。¹⁴⁾ かく云はれるロツシャーの政策論は次のやうに要約することができであらう。——彼は云ふ、「國民經濟の自然法則が豫め認識せられ承認されてをるならば、國民經濟政策の問題に關する一切の黨派論争を、それらが對立する見解に基いてゐる限りにおいて、宥和するためには必要なのは、個々の場合において唯々當該事實の正確な信賴すべき統計だけであるだらう」と。¹⁵⁾ かく國民經濟の自然法則の認識は事實の數量的把握とあひまつて自づと政策を導來すると考へるロツシャーと雖も、しかし、常に新しい問題に遭遇する此科學が政策に關して恒にこの幸運に恵まれるものであるかを否かを疑はざるを得なかつた。黨派論争は大抵の場合に、對立した見解 (Ansicht) すらも對立する意圖 (Absicht) に基いてゐることが多いのではないだらうか。しかし、彼は此疑惑に向つて次のやうな希望の解決をしたためてゐる。「けれども善良なる市民が黨派的になることを屢々強ひられてゐるところの非常な動亂時代においてこそ正に、複雑なる輿論の中で静くとも科學的眞理と云ふ一つの不動の孤立の場所——それが遍ねく承認されてゐること、あたかも極めて様々な主張を持つ醫者達ですら數學的物理学の理論をば一様に承認するのと同じであるだらうところの——を所有してゐると云ふことが、凡ゆる誠實なる黨派人にとつてどうしても望まれてゐるのでなければならぬであらう。」この主張は、ロツシャーが階級闘争の可能性を認めつつも、「國民の人類學のおよび社會的構成が都合よく國民精神が善良であればある程」社會改良は幸福に行はれると考へたのとあたかも照應するであらう。

他方において、ロツシャーは歴史的法方が驕傲に對立するものであり、それに陥らぬためには「民族の發展段階への正しい洞察」が必要であると云ふ。しかしそのためには民族を他の民族と比較しなければならぬ。若し幸ひにして人類發展の諸段階の系列を獲得するならば、その民族の發展段階は正しく洞察せられ、從つて現段階に處する客觀的な價值規準が得られることになるだらう。けれども民族は生物と同じく生長・成熟・没落の運命を辿るべきものであらう。しかしその必然性は吾々には證明されもせず、また反駁されもしない。しかもこの不明こそが實に實踐的には非常に有用なのであつて、「宗教的にまた倫理的に優秀なる民族が、その最も尊い財寶を保存する限りは、しかし勿論また唯々その限りににおいてだけであるが、未だに没落してをら

11) Roschers historische Methode (1903)

12) Knies und Irrationalitätsproblem (1905-6)

13) 白杉庄一郎「ロツシャーの歴史的な方法」(本誌第40卷、第1號。)参照。

14) W. Roscher; Grundlage der Nationalökonomie §29.

15) ibid. §27.

ないと云ふことは、人間の自由の感情を落着かせるために、大膽に保證されてよいのである」¹⁸⁾

ロツシャールの政策論は以上のやうに展開されてゐた。之に對してウェーバーは如何なる態度を取つたであらうか。

先づ彼はロツシャールに於いても經濟政策の規準が他律的であることを指摘する。ロツシャールが政策を絶えず國民生活の全體から導き出すことを要求してゐるからである。又その規準は相對的でもあると考へなければならぬ。而してロツシャールのこの相對主義のもつ限界はウェーバーから鋭く切りこまれてゐる。「彼(ロツシャール)は經濟政策の原理の基礎であるところの價值評價に唯々主觀的なる意味のみを認容し、而してさうすることによつて規範の科學的に一義的なる發見を一般に拒否すると云ふところ迄は決して進まない」¹⁹⁾即ちロツシャールの歴史的相對主義は不徹底であると批判されたのである。人はここに既に沒價值性理論の一つの表明を見ないであらうか。更に經濟政策が國民經濟の治療術であるとする敍上のロツシャールの見解は自己僞瞞であると卻けられた。かかる治療術が可能であるのは、「唯々發展段階に應じて個性的に異つた、だが常に個性的に異つたものとして客觀的に認識できる健康の正常狀態が確立される時にだけである」²⁰⁾が、このやうな假定は「純粹に現世的に志向された人生觀の立場」からは自己僞瞞なくしては不可能である。かかる思想はロツシャールの歴史哲學に基いてゐるのであるが、その歴史哲學はヘーゲルの如く論理主義に徹底し得ざる有機體説であり、而もロツシャールの宗教的なる立場と深く結びついてゐる。²¹⁾要之、舊歴史學派の此巨匠の政策論は「彼のやさしい、中庸を守る、和解的なる人格の表現であつて、明瞭な、矛盾なく貫徹された理想の表現ではない」²²⁾のである。一方で自然法則を唱へ他方で有機體

16) ebenda. 傍點は筆者のもの。

17) ibid. §263.

18) ibid. §264.

19) ロツシャールは讀者に望んでゐる、「國民經濟の指導をばどんなに部分的にでも取扱ふに際しては、常に全體を、單に國民經濟の全體のみならず、又國民生

説を取るロツシャーは、政策論に關しては後者に重點を置いてゐるのであつて、彼の歴史的相對主義は經濟政策の價值評價を獲得するためには、「その存立が絶えず前提せられてゐるところの客觀的な規範が聯關を以て展開されてゐず、あるひは形式化すら受けてゐない限りにおいて、本質的に否定的なる結果に導くのである。」²³⁾

このやうに尊敬する師に對して批判の刃を向け、而してそこでは客觀的たりえない經濟政策の價值規準が自己僞瞞にかくれて客觀的であるかのごとくに主張されてゐることを見たウェーバーは、遂にさういふ價值規準を如何にして科學に取り入れるべきかと云ふ方法的なる根據を自ら建設しなければならなかつた。『社會科學的および社會政策的認識の客觀性』²⁵⁾と『社會學および經濟學の沒價值性の意味』²⁶⁾とはこのやうにして成立したのである。吾々は以上を以て沒價值性理論の成立の前史を終へたいと思ふ。

三

ここに「沒價值性理論」を詳細に紹介する餘白を吾々は持たない、又この有名なる理論に對してはその必要もないであらう。唯々その中核を述べることをだけ以て、ウェーバー的解決の特徴を見定めなくてはならない。

彼は『客觀性』に於ける問題提出の箇所において次のやうに書いてゐる。

「この雜誌がその紙面において立法および行政の諸方策とかそれらに對する實際的提案とかを評價することをゆるすならば——それは何を意味するか。之等の判斷に對する規範とは何であるか。評價するその人が自分で述べたり、實際的提案をなす或論者がその提案の基礎に置いてゐたりするところの價值判斷の妥當性とは如何なるものであるか。科學的認識であると云ふ特徴はその認識の結果が眞理として『客觀的に』妥當すると云ふことの内に見出されなければならないものであるからして、その人はその際如何なる意味において科學的な論究の地盤に立つてゐるのであるか。吾々は先づこの疑問に對する吾々の立場を説明し、し

活の全體を考慮すべきことに慣習づけたい」と (ibid. §29)

20) Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre S. 38.

21) ebenda (ibid. SS. 38, 39).

22) ebenda (ibid S. 40).

かるのち、これに關聯して、文化生活一般の科學の地盤では如何なる意味で『客觀的に妥當な眞理』が存在するのであるかと云ふ一層進んだ疑問を論決することを期したいと思ふ。——この疑問は、吾々の學問の外觀上最も初歩的な諸問題——その研究方法、その概念構成の仕方およびその概念構成の妥當性——が絶えず變更せられ、それらを廻つて激しい論争が存在するに鑑みて、回避することのできない疑問である。²⁷⁾

方法論成立の前史を辿つて來た吾々は、此引用文からウェーバーが方法論において提出した問題とはあたかも彼が初期に於いて表明したところの實踐的認識に對する自己省察に外ならないと云ふことを、讀み取り確認する筈である。また彼が自己反省の規準としたところのものが科學的認識の客觀性と云ふことであつたと云ふことをもここで知ることが出来る。實踐的認識は行動への意慾に驅られる認識でなければならぬとともに、また眞理として客觀性を持つ科學的認識でもなければならぬのである。この二つの要求は如何にして同時に満たされるのであらうか。ここに彼が取り組み悩んだアポリアがあつた。

經驗科學とは如何なるものか。ウェーバーによれば、その行ふ任務は「經驗的實在の思惟的整序」²⁸⁾であり、「經驗的實在をその文化意義および因果聯關において認識すること」²⁹⁾である。ところが政策的立言の根柢にある價值規準と云ふものは、舊に——彼の初期の研究が明かに示してゐるやうに——「階級利益」に基くのみならず、また「世界觀」によつて定まる。従つてそれらの間には當然に鬭争が起りうる。³⁰⁾だからかかる價值規準に基いて經驗的實在について或理想を述べ經驗的實在の價值評價をなすと云ふことは、經驗科學の限界を踏み越えることなしに行はれない。それは研究者の「個人的なる事件」であり、彼の「意慾と良心との問題」である。³¹⁾彼はその場合には經驗科學の認識者の立場を去つて、意慾する人間に飛躍してゐるのでなければならぬ。そこでウェーバーはか

23) ebenda (ibid. S. 41).

24) 尤もウェーバーが學生時代に講義をきいたのは、クニースであつてロツシャーではなかつた。

25) Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis (1904)

26) Der Sinn der Wertfreiheit der soziologischen und ökonomischen Wissen-

かる立言が一方では世界觀に基いてゐるから、社會哲學の課題であるとなし、他方ではそれが「思惟する研究者」の立場を捨てて「意慾する人間」の立場に立つものであるからして、政治の領域において可能であり、それらは何れも經驗科學の果しうる任務以上のものであると考へる。かくて、一方では社會哲學と、他方では政治的實踐とを經驗科學から分つことに依つて、彼は此科學の領域を確保しようとするのである。その際「思惟する研究者」と「意慾する人間」とを嚴密に分つことが要求されてゐる。それは政治家の樂觀的折衷主義である兩者の混同によつて遂げられるものではなく、徹底的なる峻別でなければならぬ。而して此峻別が實際上極めて困難であることは、誰よりもウェーバー自らに知られてゐた。しかしそれだけに彼は此峻別を要請として高く掲げることを決意したのであつた。³²⁾

併しながらこのことは社會科學において政策的研究が全然斷念さるべきであると云ふことではない。ウェーバーは社會經濟學——吾々は初期における國民經濟學がこの變貌を遂げてゐることに注目しなければならぬ——の認識に四つの段階を數へ、「起りうる將來の様相を評價すること」すなはち政策的研究をもその最後の段階として掲げてゐる。³³⁾けれどもここに云ふ政策的研究は方法論的に限定された意味を持つてゐる。その意味を限定するものが理想型に外ならないのである。ウェーバーは理想や價值判斷に對して「科學的取扱ひ」をなすことを要望する。その科學的取扱ひ方とは、先づ「意慾されたもの自體の意義」を、「意慾された目的ならびにその根柢にある理念」を理解せしめ、次に更に進んでそれらを批判的に「評價すること」を教へる。言ひ換へればそれらのものを形式論理的に評價し、內的無矛盾性の要請に照らして吟味し、而して意慾する人が價值判斷の出發點として取り

schaften (1917).

27) Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre SS. 147, 148.

28) ibid. S. 153.

29) ibid. S. 150.

30) ibid. S. 174.

もしくは取らざるを得なかつたところの「究極の價值規準」を意識せしめ自省せしむることが出来るのである。而して正にこの價值判斷の科學的取扱ひ方が「科學が思辨の領域に踏み込むことなくして爲しうる最後のもの」³⁴⁾なのである。然らばこのことは如何にして可能であるか。

經驗科學はすべて「價值理念」と之によつて整序されるところの諸觀點」とに基いてゐる。この「價值理念」は經驗的には凡て意味ある人間の行爲の要素として確認せられ體驗せられはするけれども、經驗的素材からは妥當するものとして根據づけられ得ないのであつて、超經驗的な妥當性を持つてゐる。³⁵⁾従つてそれによつて整序されるところの主觀的な「觀點」は又科學にとつてアプリーオリであるのでなければ、科學の客觀性はありえない。だから「價值理念」と「觀點」とは行爲の理想としてではなく、實踐的志向性を失はしめて「沒價值的に」「理想型」として概念構成されるのでなければならぬ。^{*}「鋭い概念構成(理想型的概念構成のこと——田口)の懈怠は、實踐的な經濟政策上および社會政策上の論及にとつて極めて危険なことがある。この場合例へば『價值』と云ふ術語——正に理想型的にのみ何らかの一義的な意味が與へられるところの吾々の學問のかの薄倖兒——や、『生産的』とか『國民經濟的立場』とかの、一般には概念的に明瞭なる分析に堪へないやうな言葉が如何なる混亂を惹き起したかは局外者には全く信ぜられない。³⁶⁾その混亂はそれらの言葉が「理念型的」ではなく、「生の言葉から取り出された集團概念」として取扱はれることから起る。例へば「農業の利害」と云ふ場合、吾々は直ちに種々の經營形態から由來する利害の衝突に思ひ當るが、尙この外に、吾々が農業に關はらしめてゐる異質的な價值理念を考へねばならぬ。例へば人口政策的關心。このものも亦國家の權力政策的關心・國內政策的關心・文化政策的關心の下で

31) ibid. SS. 150, 151.

32) ibid. S. 157, S. 359.

33) Vgl. ibid. SS. 163, 164, u. SS. 174, 195.

34) ibid. SS. 150, 151.

*) いままで「價值規準」として述べられたものは、「價值理念」が實踐的立言にお

考へられるのであり、又その國家自體が既に多義的ではないか。だから理想型的概念構成がかかる混亂を免れる唯一の道でなければならぬ。初期のウェーバーの取つた「經濟的國民主義者」の立場も亦かかる理想型的立場の一つとして初めて科學的に客觀的でありうるに過ぎないのである。理想型理論に於いて「没價值性」が占める役割を、吾々はここで明瞭に認識しておかなくてはならない。かかる理想型的認識はその結論に向つて當然没價值的存在を要求する。即ちウェーバーは經驗科學がその手段を以て實踐的評價に關して示しうるものは次の三つに過ぎない、と云ふ。即ち(一)不可避的な手段、(二)不可避的な隨伴的結果、(三)若干の可能な評價がそれらの實踐的歸結において(一)と(二)とによつて制約されて相争ふこと、之である。而してこのことを越えて、評價の意義や構造を示したり、その價值の妥當範圍を限定したりすることは哲學の司とるべきものであり、「或目的が上の不可避的な手段をどれ程神聖にするか」とか、諸々の目的の間の争闘は如何にして調停さるべきであるかとか云ふことは、「全然選擇あるひは妥協の問題」即ち政治に關する問題である。³⁵⁾併しながらこの理想型的なるすなはち没價值的な立場は如何にして立てられるのであらうか。之に答へるものが「價值討論」(Wertdiscussion)に外ならない。このものは實踐の認識を行ふ當事者間に於いて、彼等が問題としてゐる價值を把へその價值に對して或立場一般を可能ならしめるものであつて、次の四つの思惟操作より成つてゐる。

(a)「相互に對立する諸々の意見の出發點となるところの、究極の、内面的に整合した諸々の價值原理 (Wertaxiome) を創り出すこと」個々の價值評價から出發して原理的な評價的態度に高上する此手續きは、經驗科學の手段を以て行はれず、また事實認識をも與へず、その妥當性は論理學のそれに等しい。

(b)「若しも一定の究極の價值原理が、而してそれだけが事實上の事態の實踐的評價の基とされるならば、その價值原理から歸結するであらうところの、評價的態度に對する『諸歸結』をば演繹すること」此演繹は論證については純論理的であるが、他方實

いて現れる場合の稱呼にほかならない。

35) ibid. SS. 212, 213.

36) ibid. SS. 209, ff.

37) ibid. S. 470.

踐的評價の對象となりうる經驗的事態への適用においては經驗的な確定に結びついてゐる。

(c) (一)一定の不可避的な手段に結びついてゐることに基き、(二)一定の、直接に意圖されたのではない隨伴的な効果が避けられぬことに基いて、或一定の評價的態度を實踐的に遂行することが或問題に對して生じなければならぬところの事實上の歸結を確定すること。³⁸⁾この純經驗的な確定の結果は就中次の三つでありうる。(一)その價值要請を貫徹する道が発見せられないために、その價值要請をいくらわづかながらにでも貫徹することが絶對に不可能であること。(二)その貫徹が程度の差はあれ非概然的事であること。(三)その價值要請の主張者が考慮に入れてゐなかつたやうな手段や隨伴的な結果が必然的であつて、そのために目的・手段・隨伴的結果の間のその人の價值決斷がその人自身にとつて新しい問題となり、他人への強制力が失はれるに至ること。

(d) 「或價值要請の主張者が注意してゐず、従つてそれに對して態度を取らなかつたやうな新しい價值原理とそれから歸結する要請とが主張せられること。假令その人自身の要請を遂行することが先の他の要請と(一)或は原理的にすなはち意味的に、(二)或は實際上の歸結の故にすなはち實踐的に、衝突することがあつても。(一)の場合には(a)型の問題が、(二)の場合には(c)型の(二)が再検討さるべきである。」³⁸⁾

吾々はここでウェーバーに於ける目的論の意味につき一言しておくべきであらう。社會科學の認識は因果的認識である。而して因果論と目的論とを混同して後者を前者の逆轉であると考へるシュモラー・シュタムラー・ヴントは、ウェーバーの批判の鞭を受けねばならなかつた。蓋し此混同は目的の主觀性と目的の結果との間のギャップとを忘れたものであり、従つて經驗科學の客觀性を傷けるからである。けれども彼も亦唯々一つの場合にだけ目的論的思惟を許容する。それは目的が一義的に與へられてゐて、而もそれが因果的認識における結果に等しい場合である。その時はその結果の原因がその目的を達成する手段と考へられ、目的論は因果論の單なる逆轉にすぎなくなるからである。かかる技術的目的論のみが經驗科學にゆるされるとウェーバーは考へる。けれどもこの一義的に與へられた目的そのものは豫め沒價值的に前提された目的に外ならない。而してここに沒價值性の必然

38) ibid. SS. 472, 473.

39) 例へば G. Schmoller; Volkswirtschaft, Volkswirtschaftslehre und -methode を見よ。

的なる一つの歸結が看取られねばならないのである。

要之、經濟政策學は上述の如く沒價值的にのみ成り立つ。ところで普通使用されるところの經濟政策論は、經濟現象を制約する社會現象一般⁴⁰⁾——その中で最も重要なのは國家および法律である——の研究を指してゐる。從つてかかる研究を經濟政策論と云ふ名を以て呼ぶことは實は不適當なのである。けれども此言葉がかかる問題に對して現在用ひられてゐると云ふことは、ウェーバーによれば、「外的には國家官吏の養成所としての大學の性格から」內的にはまた經濟に強く影響を與へることが特に可能な國家の強力なる權力手段から、それによつて與へられるところの正に國家を考察することが實踐的に重要であると云ふことから説明せられるのである。⁴¹⁾經濟政策論のかかる把握が政策論の結論に向つて、『職業としての學問』に於いて要望せられたやうな「講壇の評價」の禁止を齎すことは當然であると云はなければならぬ。

五

ウェーバーの初期の研究において取り上げられた政策論が彼みづからの自己批判に曝らされ、而して到達された方法論的解決の過程は以上によつて概説された。その際彼が持ち悩んだアポリアは、彼が初期の政策的研究を導いてゐた價值規準が「主觀的・個人的」でありまた歴史的に「變動する」ものであるに過ぎず、かかる價值規準に基く政策論には科學的客觀性を認め得ないと云ふ點にあつた。而かも政策論は何等かの價值規準或は價值理念なくしては立言され得ないものである。そこで政策論に對して科學的客觀性が承認さるべしとするならば、科學者は價值規準を如何にして概念構成すべきであるかと云ふことが、彼の問題であつた。かくして到達された解決

40) 社會經濟學の課題の明確な規定については、ibid. S. 500 を參照。
41) ebenda.

は、價值規準——個人の良心・世界觀に基きまた個人の屬する階級の利害によつて制約されるところの——がその實踐的性格を剝奪されて科學のアプリオリとして沒價值的に前提されることに基いて、理想型として概念構成されることによつて、公共的な科學的論究の場面に持ち來たされると云ふこと、従つてかかる研究の結論に對して實踐的な性格を要望することはそれ自身背理なのであつて、かかる實踐は科學以外の場所にこそゆだねらるべきであると云ふことであつた。理想型理論と沒價值性理論との緊密なる聯關はかくして露はにされる筈である。「價值判斷の主體的なる中核」の不明瞭性の故を以て歴史學派の價值規準を卻け「自己抑制」を以て經濟學に入つたウェーバー、而して更に一步進んで自らの立場そのものに對して方法論的な懷疑をいだいたウェーバーは、遂に科學に於ける實踐的主體性を自ら放棄することによること以外には、即ち主體性をむなしうすることによつてでなければ、科學の客觀性を維持することができぬと云ふ結論に到達したのであつた。ゆゑに沒價值性(Wertfreiheit)理論はとりも直さず沒主體性(Subjektfreiheit)理論であると云はれなければならないのであらう。而してここに放棄されたる主體性は何處にその存在を保つたかと問ふならば、理論的には個人の良心・世界觀の中に、而して實踐的には政治の領域に、と答へられねばならなかつた。かくてアボリアは「意慾する人間」と「思惟する研究者」との峻別云ひかへれば學問的人格の分裂を要請することによつて解かれたのである。

然らばかかる解決は如何にして可能であつたか。

吾々が前稿⁴³⁾において略述したところのウェーバーの性格を形づくつた三つの契機——實踐的・政治的素質と倫理的・カント主義的世界觀と即事性と——がその一つの理由であることは明かであらう。彼は政治的素質の極め

て豊富な人であつただけに、而して自己責任の觀念が非常に旺盛な人であつただけに、又飽くまで經驗的事實に即して思索しようとした人であつただけに、經驗科學の持つ制限に敏感であり、またそれに對して忠實であることを自他に要求すると共に、世界觀に對しては多くの價值理念の鬭争をゆるし、行動に對しては自由なる政治的領域を指し示したのである。けれどもそれと同時に、次のことは此解決に對して決定的であつた。それは價值規準が個人によつて異なる「主觀的」なるものであり、また時代によつて異なる「變化しうる」ものと考へられたことである。このことはそれだけとしては正しい主張であると云はなければならぬ。併しながらこのことからしてウェーバー的解決が充分に具體的であるとは云へないであらう。いま價值規準の歴史性について述べるならば、歴史性とは單に時代と共に變轉すると云ふこと、現在はまだ時の流れの中の一つの通過點にすぎないと云ふだけの意味しか持つてゐないのではない。それは現在の狀況を確乎として把へるためにこそ主張さるべきものであり、現在は過去の末端として終結する場所であると共に又未來がそこから新しく展開さるべき場所として、實踐への決意をうながすところではなければならぬ。だから價值規準の歴史性の主張は、未來に向つては、新しく決意され實踐を指導すべき價值規準を認識させる所以となるべき筈である。而して經驗科學に就いても亦、かくして發見された價值規準が歴史的に客觀的なものとして、歴史を更に形成するものとして、取り上げられなければならぬであらう。ウェーバーの如く價值規準が科學において客觀的に取り上げえないと云ふことは、却つて價值規準が超歴史的に把握され、従つて實踐的主體的なる認識の主觀が自らの立つ地盤を喪失してゐる時に初めて云はれることであり、ウェーバーは宛もかかるカント的認識論の立場に立つてゐるのである。要するに、歴史學派一般について批判される超歴史性からウェーバー自らも亦まぬがれてゐないと云はなくてはならない。兩者の異なるのはただ、前者の相對主義に對して後者がそれに對して認識批判的であつたと云ふことである。次に價值規準

が「主觀的」であると云ふ主張は具體的な意味を充分に表現してはゐない。價值規準が恒に個人によつて意識されると云ふ意味からはそれは正しいけれども、それが同時に個人によつて恒に異なるのであつて、個人的であると共にまたそれ以上のもものでは決してありえないと云ふ主張を含む限りに於いて、此主張は抽象的であると云はねばならない。何故にウェーバーがかかる主張をなしたかと云ふならば、吾々の答は簡單である、それは彼が時代の子として個人主義者であつたと云ふことである。沒價值性理論はまた個人主義的方法論であつたのである。〔註〕ウェーバーは時代の子であり、又それであることに忠實であらうとした。彼は資本主義を變革しようとして云ふ意圖を持たなかつたが故に——此意味から彼の方法論は安定期の方法論であると云はるべきである——かかる個人主義的な又徹底した相對主義的な解決に到達した。彼には價值規準の共同性從つて客觀性の可能が覆はれてゐたのである。吾々は經濟學の政策論的研究が行動への指令を與へうるものでなければならぬと考へる者である。而してそれが方法論的に價值規準の共同性・客觀性の可能の根據を歴史的現實のなから認識することから始めらるべきであることを確信し、さうしてそれはウェーバーが初期の研究においては行はんとしながら、而も事態の眞の歴史的なる把握をなしえなかつたがために、方法論的研究においては放棄してしまつたところの國民經濟と云ふものの新しい分析と位置づけとから獲得されうべきものであることを主張しなければならぬ。さうしてかかる把握が可能であるためには、從來の認識論とは異つて歴史的現實に於ける行動の主體をその具體性において把へ、行動の主體と相即するところの認識の理論を獲得することが要望されるであらう。

〔註〕 吾々はウェーバーが初期の研究において價值規準を國民國家の權力價值に置き、その擔當者を階級に求めたことを知つてゐる。併しこのことは價值規準の個人性の主張と矛盾するものではなかつた。何故なら彼がその時政治教育に最も望みを囑したブルジョアジーは他の階級とは違つて——それらはそれぞれに個有な非合理的なるものを持ち、それによつて結合した結合しうる——「合理的なる個人の集合」と云ふ特色を持つ階級であるからである。又彼が「國民國家」と云ふ場合、國民經濟が諸國

民の文化闘争の一つの複雑なる形態と考へられてゐたが、かかる形態が資本主義的國際關係に於ける國民經濟の在り方であることは先に述べられた通りである。⁴⁴⁾

凡そ科學の客觀性は科學が生命の表現であると云ふところから生ずるであらう。その生命は歴史的社會的世界に主體的に生きる生命でなければならぬ。此生命に對してドイツ歴史學派は經濟學に於いては最初の指示を與へたと云つてよい。ウェーバーは此學派の傳統の下にあつてそれを批判的に高めようとした。併しながら歴史的な生命(民族)が現實には個人に分裂することに基いて、從つて階級的なる構成を擔ふことによつて國民經濟として統一されてをるのであり、而して國際的には、他の國民經濟と敵視し合ふものとして現れてゐるのであるから、彼はそれを再び個人から構成し、國民經濟を争闘の形態として把握して、歴史學派の有機體說的なる方法論を科學の客觀性のためにカント主義的に批判しなければならなかつた。彼は現實に對して忠實であつたが故に、その解決は生命よりの乖離として科學を把へることによつて成し遂げられたのである。此解決そのものは現實の歴史的な生命の在り方の表現として、客觀性を持つものと云はるべきであり、沒價值性理論の歴史的必然性にかくして了解せられるであらう。科學の客觀性もまた歴史的現實の制約から自由ではありえないのである。

最後に、吾々は沒價值性理論の現代的意義について人々の注意をうながしたい。ウェーバー的解決は、彼が自然主義的偏見を極度に排斥したにもかかはらず、一見自然主義への復歸の如き觀を呈した。だから一方に於いては、ウェーバー以後の市民經濟學は、ウェーバーの持つた悩みをなやむことなくして安易に「沒價值性」を取らうとしてゐるに對し、他方に於いては、それらの理論に對立しようとする理論が、同じく「沒價值性理論」の皮相なる理解を以てこれを嘲笑し、科學の客觀性を省みることなくして徒らに *Politisieren* することを以て新しい科學でもあるかの如く考へてゐる。而もその後者が實は市民經濟學の別働隊に墮する危険を孕んでゐることはまことに皮肉だと云はねばならぬ。眞にウェーバーを越える道が、ウェーバーの悩みを自らのやみ彼の努力に深甚なる敬意をはらひつつ彼の解決の歴史性を正しく認識するところにこそ、開かれねばならない所以であらう。